

平成 21 年度 大学院入学式告辞

大学院修士課程または博士課程への入学おめでとう。325名の大学院生を迎えることになりました。このなかには、20名の外国人留学生と72名の社会人が含まれています。香川大学はあなたたちを心から歓迎します。

あなたたちは、修士課程、博士課程、専門職大学院課程の院生ですが、学士課程や修士課程からの進学者や社会人であったり、外国人留学生の人もあり、さまざまな志向性と専門性、属性を持っています。したがって、大学院課程において達成すべき目標や目的は多様かも知れませんが、私は、香川大学の大学院修了者には社会をリードし、社会からも尊敬される人格を備えてもらいたいと強く願っています。

ここ半年あまりの経済状況の変化は100年に一度などと言われていますが、あっという間に世界金融危機へと姿を変え、世界中に大きな不安を引き起こしています。しかし、これだけの社会の大きな変化は、今までの社会が認めてきた価値を見直す機会であると捉えることができます。我われがこれまで信じ、目標にしてきた「幸せ」や「人間の豊かさ」とは何かを改めて問い直す必要を示しています。今までとは違う「新しい価値」の創造、言い換えれば「新たな文明史観」の創造が求められているように感じています。このような課題に応えられるのはあなたたちのような若者であり、新進気鋭の研究者であります。あなたたちの挑戦に大いに期待しています。

昨年の明るい話題の代表は、何と言っても4人の日本人がノーベル賞を受賞したことでしょう。「素粒子論」で受賞したのが3人の日本人物理学者で、「緑色蛍光タンパク質(GFP)の発見と生命科学への貢献」で受賞したのが日本人化学者でした。物理学賞の対象になった南部博士の論文は1961年のものであり、小林・益川両博士の論文は1972年のものであります。化学賞の対象になった下村博士の論文は1962年のものであります。いずれの論文も今から40年近くかそれ以上も昔のものであります。しかし、私が注目したいのは、4人の研究者が試みた40年前の発想や着想は当時の科学研究動向や思考の延長線上で考えたのではなく、すなわち改善や改良という視点ではなく、まったく新しい発想に基づく研究であったということです。そのことは、

先の申し上げました「新しい価値」の創造，あるいは「新たな文明史観」の創造に通ずるものであり，それらに対応できるのはあなたたちのような若者であり，新進気鋭の研究者であります．ここでも，私たちはあなたたちのチャレンジに大いに期待しております．

21世紀に解決しなければならない人類共通の重要な課題として，地球温暖化に代表される地球環境の問題をはじめ，エネルギーや食料，水に関する問題はあげられます．また，確実に進行しつつある少子高齢化社会に起因するさまざまな社会的課題もあります．一方では，21世紀は，新しい知識・情報・技術が飛躍的に重要性を増す，いわゆる「知識基盤社会」と言われています．資源やエネルギーに乏しい我が国にとっては，人々の知的活動・創造力が最大の資源であります．したがって，地球規模的課題に新しい視点を持って挑戦し，あなたたち自身が日本における知的活動・創造力の担い手になることをめざしてもらいたいと思います．

あなたたちは最先端の研究課題にこれから取り組んでいくことと思います．それは，ライフサイエンスやナノテクノロジー，情報通信，環境，地域開発の分野であったりするでしょう．大学院においては，最先端の課題にあなたたち自身の力で取り組むことが重要であります．常に考えてほしいのはあなたたちが取り組んでいる研究課題の位置付けであります．自分の研究課題が，例えば生命科学の中でどのような役割を果たしているのか，また工学の中でどのような役割を果たしているのか，自然科学全体に対してどのような影響を与えることができるのか，さらには人類の幸せのためにどのように役立つとしているのかを常に考えていただきたいと思っています．それも自分ひとりだけではなく，周りの仲間とディスカッションすることが大切であります．そのような日常的活動があなたたちの研究の幅を広げ，あなたたち自身の将来の発展可能性を大きくすることにつながることは間違いありません．

あなたたちが香川大学での大学院生活を通して，豊かな教養と高度な専門知識を備えた研究者や高度な技術者だけでなく，社会のあらゆる分野で活躍できる有為な人材に育ててくれることを願っています．

平成 21 年 4 月 4 日

香川大学長 一井 眞比古